

■大谷高校「高2定例仏教講話」

「自利利他円満」

真城義磨校長

2010年9月22日

本校は言うまでもなく親鸞聖人の教えに基づいて教育を行っていきまして、時どきにその教えを確かめる行事を開いています。それで、親鸞聖人が人間としてのいのちを終えていかれた日が十一月二十八日でありますので、私たちその親鸞聖人の教えの流れを受けるものどもは、その二十八日を意識しながら親鸞聖人の教えというものを改めて確かめ直す、そういう催しが行われているわけです。本校では、定例仏教講話という名前で行っております。

さて、この講堂の中心に御本尊が安置されています。真中に「南無阿弥陀仏」という文字が書いてあります。それは親鸞聖人の筆跡をそのまま写してデザインしたのですが、それが丸い輪の中に入っていて、その外側を蓮の花びらが取り囲んでいて、四重の輪があり、十二の放射状の線がある。それは全部南無阿弥陀仏、阿弥陀仏という仏様の様々な働きを象徴的に表しているものです。

今日は、学園祭の関係で扉を閉めて、ここに「<sup>きみとうじんじつぽうわげこうにょらい</sup>帰命尽十方無碍光如来」という軸が掛っています。「南無阿弥陀仏」は漢字六文字ですので六字名号と言います。こちらは十文字ありますので十字名号というふうに言いますが、南無阿弥陀仏と、帰命尽十方無碍光如来というのは同じ意味でして、阿弥陀仏という仏様、阿弥陀というのは分かりやすく言えば「ミタ」という、君たちの知っている言葉で言えば1メートル、2メートルという距離を図る単位がありますね。その元になっているインドの一番古い言葉で、「ミ」というのは量る、計測するという意味です。「ミタ」というのはそれができたということで、それがヨーロッパに伝わって、ヨーロッパのメートルという言葉の先祖になります。この「ミタ」に、インドの言葉では、最初に「ア」という接頭辞がつくと、意味が逆転します。ですから「ミタ」というのは量る事が出来たという意味ですね。「アミタ」というと、量ることのできない、あるいは量る、測定するとか長さを比べるとかいうことに意味がない、そういうことで「無量」と訳されることもあります。そして何が無量、量ることができないのかというと、それは光といのちと言われるんですね。その光の方を違う言い方では、ここにあるように「尽十方無碍光」というふうに言っているわけですね。「尽十方」の「十方」というのは四方八方の八方に上と下を合わせて十方と言います。ということは、あらゆる方向、どの方向に向かってもさえぎるものがない。ということは違う言い方をすれば、この方向には光が当たらないという、そういう欠落がないということですね。全ての方向に円満に、尽十方の尽は尽くすという意味ですからね、あらゆる方向に向かつてというのが「尽十方」、「無碍」というのは、障害物がない、あるいはあっても問題にならない。ですから諸君がどこで何をしても仏様の光があたっている。だから、安心して生きていいということの呼びかけですね。

「帰命」というのは、そこに自分の拠り所をそこに置いていく。先ほど、パーリ語という、お釈迦様の時代に話されていた言葉ではないかと言われているインドのマガダ国という地方の言葉ですが、パーリ語で「ブッダン・サラナン・ガッチャーミ」と唱和しました。「ブッダン」というのはブッダというのは無碍光如来の如来、阿弥陀仏の仏のことですね。

「サラナン」というのは、色々な意味がありますが、例えばパーリ語と英語の辞書で引くと、シェルターと書いてあります。避難場所、そこへ行けばもう防御しなくてもいい、構えることのいらぬ、このように自分を見せていこうと演技する必要はない。ありのままの自分がありのままで心配いらぬ、安心していらぬ、そういう場所、あるいは状態のことを「サラナ」と言います。「ガッチャーミ」というのは、英語の go、行くという言葉と祖先が一緒に、そちらの方に進んでいきますという意味ですから、「ブッダン・サラナン・ガッチャーミ」というのは、ガッチャーミというのは古代のインドの言葉では動詞の変化の中に主語が含まれてしまいますので、最後がアーミで終わったら一人称、単数ですね。ですから、私は仏様を私の安心感として人生を進んでいきますということですし、「ダンマン・サラナン・ガッチャーミ」は、その仏様が教えてくださった真実、教えというものを自分の拠り所、帰るところとし、安心として生きていきます。「サンガン・サラナン・ガッチャーミ」は、そのことを信じて、ともにそういうことを共感している人たちを、私は安心の拠り所として生きていきます。これが「ブッダン・サラナン・ガッチャーミ ダンマン・サラナン・ガッチャーミ サンガン・サラナン・ガッチャーミ」ということであります。

つまり親鸞聖人の開いてくださった教えというのは、どの人のどの場面のどの瞬間にもちゃんと仏様からの光が届いている。ということは、仏様が見て下さっている。それは何のためか、皆さんに生き生きと生きてもらうためですね。応援しているから、心配しないでいいよ。安心して、君は君として生きていけばいいよ。人に見せて演技ばかりする、あるいは守ってばかり、防御ばかりしている、あるいは接点を減らしていこう、そういうのではなくて、君は君として素晴らしいんだから、ありのままの自分のいいところを大事に、自分で自分をちゃんと認めて、そして自分らしく生きていってほしい、応援しているよというのが仏様からのメッセージ。それに対して共感しました、共感していますというのが「南無阿弥陀仏」という念仏ということになるわけです。

仏教の歴史というのは、お釈迦様の言葉から始まるわけですが、お釈迦さまがいくら言葉を出しても、本当にその通りだなと感動して生き方が変わっていく人たちが続々と出てこない限り、この仏教というのは成立しなかったわけですね。国境を越え、時代を越えて二千五百年もの間、たくさんの国を通過して日本の現代にまでお釈迦様の教えが届いている、伝わってきているということは、ずっとそこに「本当にそうだ」と、そのことに共感しながら、自分は思い通りにならない人生、辛いこともある、挫折することもある、心配でたまらないこともあるけれども、しかし根本的なところで安心して生きていくことができますという人たちの歴史でもあるわけです。私たちの先輩方は大変に辛い苦しい経験を沢山しながらも、そこで本当に絶望するしかないような状況で絶望しなくて済む人生というものをつと築いてこられた。その仏教は、少しずつ少しずつ教えに広がりとか奥行きとかができてきて、お釈迦様が亡くなってから数百年経つと、大乘仏教運動という運動が起こります。「大乘」というのは、聞いたことがあるかと思いますが「大きな乗り物」です。

大きな乗り物としての仏教を大乘仏教と言います。そして、それまでの仏教のことを大乘仏教の人たちは「小乗仏教」というふうに言ったわけですが、小乗仏教ということ自ら名乗っている仏教徒が地球上にいるわけではありません。現在もいませんし、今までもないことはありません。それは、大乘仏教の人たちが、自分たちは小さな乗り物ではないのだというために小乗仏教という言葉を作り出しただけであって、自分たちの仏教は小乗仏教であると、今のスリランカとかタイとかミャンマーとかのお坊さんがそう思っているかという、それは違います。しかし、大乘仏教という大きな流れができてきた。大乘というのは、先ほども言いましたように大きな乗り物、大きな乗り物というのはどうのことかと言いますと、自分だけが助かればいいんじゃない。自分だけ救われればいいんじゃない。「ともに」という世界ですね。あらゆる人がともに幸せになる方向で生きていきたいという動き方ですね。それが大きくなるとなると大乘仏教運動というのがインド全土で少しずつですが広がっていきます。そして、中国に伝わり、朝鮮半島を介して日本に伝わるわけです。日本に伝わった仏教のほとんどが大乘仏教という仏教です。

もちろん、浄土真宗、親鸞聖人の教えも大乘仏教であります。大乘仏教というのは先ほども言いましたように、一人だけうまくいけばいいんじゃない。みんな共々ということですね。仏教の言葉で言いますと、「自利利他円満」と言います。「自利」と言うのは自分の利益・満足のことで、「利他」は他の人にもうまいことしてもらい、「円満」というのは、そのバランスが取れているということですね。自利利他円満ということですね。これは諸君の日常的な言葉で言えばどういうことになるのかなと思いますが、僕なりに言ってみれば、自利というのは自己実現、自分が本当に自分の納得のできる人生を作っていく。そういう方向性を持っていく。先日、大谷にある報せが届きました。それは今年の司法試験の合格発表があったわけですが、何万人受けても今年合格したのは二千人ぐらい。東大の法学部を出れば合格するとかそういうレベルではない。東大の法学部を出ても、そこから法科大学院に行って必死で勉強しなければなかなか受からない。そういう難しい試験に本校の卒業生が今年四人合格した。非常に優秀な成績の人もいたそうです。それは素晴らしいことだと思います。本当に努力されたんだと思います。司法試験に合格することは、弁護士になるとか裁判所で働くとか、様々な法務省の関係の管轄の仕事をするわけですが、この仕事はほぼ一つの例外もなく、自分のための仕事ではないんですね。法のもとで生活をしている人たちが、法のもとで不公平が起こってはならない。あるいは正義が歪められてはならない。事実をきちんと法のもとで明らかにしていかななくてはならない、そういうことに関わるお仕事を基礎資格としての司法試験に合格したということです。ですから、これは利他という他の人のためになる。先ほど自利は自己実現だと言いましたが、この四人の人は自己実現に向かう一つの大きな関門を越えたと同時に、それは他者貢献、他の人の役に立つ、そういうことにつながっていくということですね。

諸君が今、高校二年生として生きている。高校時代で言えば、今現在あたりがちょうど三年間の折り返し地点ということになるわけですが、これまでを振り返り、これからを考

えていくにあたって、自分は何をしに、何のために大谷高校に入学して学校生活を送っているんだろう。今は自分はどっちに顔を向ける必要があるのか、自分は今どこへ行こうとしているのか。どこへ行きたいのか。自分は本当はどうなりたいのか、どういう人間として生きていきたいのかということを中心にきちんと考えてほしいと思いますね。例えば二十年后に周りの人たちから、あなたはどんな人だと言われたいか。先ほどある生徒と話をする機会があって、試しに聞いてみました。彼に、男子生徒でしたけれども、二十年后どういう人と言われたいですかと聞いてみると、自分は二十年后、人から喜んでもらえるような、頼りにされるような、そういうふうに言われたいと言いました。それでは、今現在がそれにふさわしい進み方になっているのかということをお話しました。そういうことを考えた時に、皆さんだったらどうだろうか。二十年后に自らを振り返って、自分はよくやってきたな、よくがんばってきたな、いろんなことがあったけれども、そこそこ来たなという実感と、他の人から「あなたがいてくれるおかげで」「あなたに会えて良かった」あるいは「あなたとともにいるととても気が楽だ、安心できる」、あるいは頼りにできる。よく相談に乗ってもらった、助けてもらったということの中にいたいということがありますよね。つまり、「ありがとう」と言われる人生、実際に言われるかどうかは別にして、ありがたいと思われる人生、そういうのを利他と言いますね。

ですから、私たちがいくら自分の目の前の思ったことが叶えられて、ラッキー、うまいこといったということになっても、そのことが他の人から、あなたがいてくれたおかげで、あなたと一緒にいて良かったとか、よくぞあなたはこの世に生まれてきてくださったものだというように言われることがなければ、それは大変にさびしいことになるのではないかと。大儲けをして、ブランドの服を着、世界の高級食材を食べ、お城のような家に住みながら、周りの人みんなから恨まれ、憎まれ、うとましがられ、そういう人生は本当に幸せと言えるのか。そんなことを考えた時に、諸君一人ひとりがこうなりたいのだということをはっきりと思うということが、今の学校生活の中の手ごたえとか充実感とか、実感とか、そういうものにつながるのではないかと。

いつまでも、誰々がこう言っているから、なんとなく世の中はこういうことを求めているみたいだから、みんな大学に行くから、たまたま何とかの点数がいいから。それはそれでとても大事なことです。だけど、それも含めて、そんな中で自分は自分というものをどこに連れていこうとするのか、そこをちゃんと持つと、そこがはっきりと見えてくると、それは途中でいくら変更してもかまいません。そうすると、自分が今やっていることすべてに意味が生まれてくるんです。朝ご飯を食べるのも自分の目的地に着くためには必要なことです。昼ごはんを食べることも、しっかりと睡眠をとることも必要なことです。与えられた様々な課題や、そういうものをきちんとやり遂げるといことも全部そこにつながってきます。今、こんなことの勉強をするのに何か意味があるのかなと思うことがあるかもしれない。でも、それは間違いなく、諸君の可能性を広げ、諸君が自己実現をし、他者貢献をする人間になるために、全部つながっていきます。

そうすると、逆に言うと、今やらないということが、自分自身の未来というものをいい形で、自分でああ良かったと思えるような形で進んでいくことの妨げを自分でしていることになる。諸君には、ものすごい、とてつもない能力が一人ひとりに与えられている。それは、皆一人ずつ種類や質が違います。現れ方も違うと思う。それは、先生から見つけてもらって伸ばしてもらおうということもあるだろうし、何かの拍子に自分で気づくことがあるかもしれない。自分はこの方面でがんばりたい、そのことはそれぞれだと思えますけれど、その君たちが持っている潜在的な能力や資質や力というものが本当は出たがっている、伸びたがっている、高まりたがっているのを誰が邪魔しているのか。誰が妨げているのかというと、自分ではないのかということです。いつも自分で自分を裏切り続けていないか、自分の中にもっと成長したい、もっと自分はこんなふうになるんだというものがあるに違いない。それを横において、目の前のちょっとした勝った負けた、得した損した、一人いい目にあった、あいつに嫌なことがあってざまあみろと思った、そんなようなことも多少は人間ですからあると思いますが、もっと根本的な大事なことに目が向くというか、意識が向くということが大事なのではないか。

もうすでにそのもとになるベースというのは諸君の中にあります。色々そういうことを考えた時に不安になることもあるかと思う。でも一番根本的なところで、大谷の先輩方が、あるいは親鸞聖人の教えを聞いてこられた先輩方が、どんな状況になっても基本的な安心感というものについては、本当に仏様の願いを信頼して、自分を信頼し、周りの人を信頼するという形で進んできたわけですね。諸君は今から十何年か前にこの世に生まれてきた。その瞬間、その赤ん坊は、何の力もない、何の能力もない。ただいのちの塊としてこの世に出てきた。しかし力のない赤ん坊が、そのことだけでどれだけ沢山の人たちに喜びや幸せ感を与えたか。諸君が生まれたことを周りの人たちが、親が、近所の人たちも含めて、いろんな人たちが喜んでくれた。待ち望んでいて、その中に君たちが生まれてきた。そして、人間はあらゆる生き物の中で一番未熟に生まれるわけですから、生まれてきた人間が、赤ん坊が誰も世話をしてくれなければ、ほんのわずかな間にいのちが終わってしまう。それを自分のいのちを削ってでも、諸君を生かすために周りの人たちが必死になって、ここまで応援をし、支えてきたわけですね。

誕生日を迎える時に、周りの人たちが「お誕生日おめでとう」と言ってくれると思いますが、諸君からすると、誕生日はただお祝いをしてもらうだけではなくて、「自分をこの世に送り出してくれて、ありがとう」、そして「今日まで支えてくれてありがとう」という日でもあると思う。そういうふうに関係が大事なことだし、一日一日、皆から支えられて生きている。と同時に諸君は一人ひとりがみんなを支えている。諸君が生きているということを生きがいにして人たちがいる。諸君が辛い時に、その辛さを分け合う人たちが沢山いる。そんな中にもいるんだということで、自分を大事にしながら生きていく。

それで、自己実現するためにも他者貢献をするためにも、諸君はやはり、考える力、あるいは考える力のベースになる基礎的な知識や問題の解き方や問題の見つけ方をきっちり

と、沢山持たなくてはならない。君たちは色々、こんな知識ばかり覚えてどうなるのと思うかもしれないけれど、その知識は、その知識を覚えることが目的で覚えているわけではありません。その知識を一旦、君たちの中に入れて、それを今度は自分の知恵として出すための基本的なものとして、今知識を吸収しているわけです。そして、その吸収した知識が今度は知恵として出る。僕はこうして偉そうに喋っていますが、僕の基本的な知識のベースは高校時代に習った全教科です。今と違って、あまり選択科目というのはなかったですから、理科で言えば物理も化学も生物も地学もありました。社会で言えば、地理も日本史も世界史も倫理社会も政治経済も、いろんなものがあつた。だけど、今から考えてみれば、そのどれ一つとして無駄なものはないですね。いろんな最低限の基礎知識があるために、どんな本を読んでも面白い、誰の話聞いても面白い。そこに自分にとって大切だなと思うことをそこから吸収することができるのは、最低限の基礎知識ですね。数学は数学で面白いものはいっぱいある。国語は国語で、英語は英語であるし、理科もそれぞれ、物理やっておいてよかったな、生物やっておいてよかったな、ありますよ。地学なんかでも、知っているのと知らないのとでは、いろんなところに行った時の物の見え方が全然違う。あるいは夜になって星を見ても、天文の知識があるのかないのかによっては随分と見え方が違います。今、世の中がどんなふう動いているのか、今あの政治家がこんなことを言っているのはどういう意味があるのか、何を目指しているんだろうということをちゃんと見抜いていったりするための基礎的なことが必ずある。それが豊かであればあるほど、君たちが今後、自分が表現する、出していくのが豊かになっていくわけです。ですから、変な言い方をすると、ネタを仕入れているようなものなんですね。それは体育も含めて、すべての学校生活に限らず、今生きていることの全部が次の瞬間の諸君のいろんなものにつながっていく。やっているその時は、意味が分からなくて、ただやらなければならないからやると思うけれども、それは必ず意味を持つ、間違いありません。

しかしそういう中で、一番やる気になるのは、自分がどういうふう一人前になるのかということがある程度見えてきたら、すべてが本当に大事なことになる。もう随分前になりますが、横浜ベイスターズに熊谷組から入団した波留敏夫という選手がいます。横浜ベイスターズが優勝したときの二塁手です。今もベイスターズにいますが、現役の選手ではありません。彼は山科の勸修中学校の野球部から、当時大谷高校には榎木さんという監督がいたんですが、その監督のもとで自分は野球をやりたいということで、いろんな高校がある中で、大谷高校に入学して野球部に入った。彼は中学校の頃から、プロ野球の選手になりたいと思っていて、しかも体が大きいわけではありませんで、自分はホームランバッターになるわけでもない、ピッチャーになるわけでもない。自分は野手として、本当に沢山の試合に出て、足で稼ぎ、小さな安打を打ってがんばる、そういう選手になりたいという、はっきりとイメージができていました。そこで、そういう自分に大事なものは何かを考えた。スタミナであり、基礎体力である。そこははっきりしているから、彼は山科の勸修から大谷高校まで毎日の登下校、山を越えてランニングで往復するわけですね。

君たちからすると、なぜそんなしんどいことをと思うかもしれないけれども、彼にしてみれば、それは自分を訓練するための、自分を高めていくための、自分の目的地に近づくためのとても意味のあることです。朝ご飯を食べるということも、自分がプロ野球選手になることにつながるんです。昼飯もそうです。しっかり睡眠をとるということも自分がプロ野球選手になるということにつながる。彼はそれをやって現に実現をしたんですね。

あるいは、今年、やっぱり横浜に入りました福田という本校の野球部出身の選手がいますが、彼も本当に努力した人です。福田という選手は、少し紆余曲折があって、子供の頃からの夢をひとつだけ追いつけたという感じではないんですが、それにしても行き先がはっきりしているのと、自分が今、行き先に近づいていっているのか、遠ざかっていっているのかということが分かるわけです。行き先がはっきりしていると、今の自分がちょっと方向が違うということにしばらくすると気がつきます。そして、修正することができる。それは、とても大事なことです。

そういう点で、本校の校歌の中に「良き世の中の人となるために」という言葉が、一番も二番も三番も四番もこの言葉が入っています。これはとても素晴らしいなと思います。この校歌を作ったのは、大木惇夫という詩人です。本校には校歌が二つあって、昭和の初めに北原白秋という詩人が作詞し、山田耕筰という当代一といわれる音楽家の作曲で校歌が作られました。それは今でもすばらしいものだと思います。ただ、段々その言葉の中に時代にふさわしくないものがあり、大谷が新しく生まれ変わるために校歌も一新しようということで、昭和三十九年、本校が創立九十周年を迎える年に新しい校歌が委嘱されました。その年は本校が甲子園に野球部が出場した年でもありますね。その年度の春の大会に本校は甲子園に出て、私の故郷であります今治南高というのと対戦して一回戦は勝って、二回戦で負けたんですけれども。先ほど言った榎木という監督は、今は龍谷大学の野球部の監督をされていますが、その方は昭和四十年三月の甲子園の時のメンバーの一人ですね。

ちょっと話は横にそれますが、新しい校歌をどなたに作詞してもらおうかということで、当時の広小路亨という校長先生は考えられたんだと思います。そのことについて直接お伺いしていないので、想像を話します。この大木惇夫という方は、先ほどの北原白秋という方をとても尊敬していて、北原白秋の後を継ぎたいと思って詩人になられた方なんです。合唱をやっていると、大木惇夫さん作詞の曲に出会うことがあるのではないかと思います。その当時いや、もう少し前ですね、人間詩人と呼ばれて大事にされた人ですが、君たちの中でも詩人になろうと思っている人がいたら少しあれかもしれないけれども、詩人というのはよほど売れない限り、経済的生活は苦しいわけです。そうすると、今だったらコマースャルソングを書いたり、いろんな会社の社歌を書いたり、学校の校歌を書いたり仕事もあるんだけど、大木惇夫さんは戦争中に生活のために軍歌とか戦争賛美のための作詞もしていますね。そんなことが戦後は、戦争協力詩人ということであまり光が当たらなかった。それで、大変に生活も苦しかった。そのあたりを見かねてかもしれません。ちょっと援助ということもあったのかもしれませんが、その当時の広小路亨という校長先生は、大



木惇夫という人に本校の校歌の作詞を依頼するわけですね。

作曲は、日本の合唱曲ということで言えば、二十世紀の日本を代表する作曲家ですね。清水脩さんという、「月にピエロ」とか、音楽の世界では知らない人はいない清水脩という最高レベルの作曲家に曲をお願いして、大木惇夫さんに詩を書いてもらった。その大木惇夫さんが本校の校訓とか、学校の歴史とか勉強された上で、「比叡四明、明けゆく空の」という校歌を書かれたわけですが、その中で一番から四番まで「良き世の人となるために」ということがあります。諸君は常にそのことを考えてほしいと思う。良き世の人となるために今、自分は、勉強をしているんだ。クラブ活動がんばっているんだ。学校生活を送っているんだ。その良き世の人というのは、それぞれ一人ひとりが自分の中でイメージを作ってください。

働く、仕事をするというのは、変なダジャレで「はたらくというのは、<sup>はた</sup>傍を楽にすることだ」とよく言われます、仕事の世界ではね。お金が儲かるというのは別に悪いことではありません。それはどういうものに諸君がお金を納得して払えるかということ、例えば自分が受けたサービスを受けたいレベルで得ることができれば、それにこれだけかかるんだったらいいなと思って払いますよね。あるいは、こういうものが欲しい、そのものにこの値段がついている。その欲しいというレベルは人によって随分違いますから、本当はこれが欲しいんだけど、高いからこれぐらいの値段だったらデザインも含めて妥協できるというようなものを買うわけですね。これは、物が売れてお金を得たということは、それを望む人がいたということですから、経済活動も一方で言えば、喜んでくれる人のためのサービスをし、物を作れば、それに対してお金を払ってくれるということです。つまり、ありがとうということをお金で表すのが経済だということです。しかし、ただこれは下手をすると、お金が増えることだけを目的にするということに落ち込んでしまいます。そうすると現在の世界の金融状況のように、誰の役にも立たない、お金だけがただ増えるということだけでお金をグルグル回して、結果いろんな人たちが振り回されているわけです。

他者貢献をきちんとすると、それは喜んでもらえるし、対価をもらえるということになるわけです。仕事をするというのはそういうことです。先生方は全員が、自分のためだけに働いているわけではない。諸君が成長して、あの先生の授業を受けて良かった、この先生に担任をしてもらって自分は成長できた、いい学校生活を送れたということのために、先生方は皆先生になり、毎日仕事をしている。

そういうようなところで、仏教の学校で学ぶ諸君が、自分の目的地と言いますか、なりたい自分のイメージというものを持ってほしい。その一つの大きなヒントは自己実現ということと、他者貢献ということですね。自分で自分はこうなるんだ、ああなりたいんだということ、とにかく一生懸命がんばって手にいれると同時に、そのことが他の人から喜んでもらえるような、そんな人生になってほしいということをお願いながら、今月の定例仏教講話といたします。以上です。

(35 分)